



# 私のひとりごと

## ばあちゃんの引き出し

「私たちの口から大変申しにくいんですが、オール電化を積極的に推奨できないことになりまして……。」  
 これは、先日、電力会社の営業マンが訪ねられた時の言葉である。以前は電力を少しでも多く使って頂ける様にと勧められたが、昨今の電力不足が見込まれる中、オール電化を勧めるのは「非国民」だと批難されるので、彼らとしても非常に辛い立場の様子である。また、この地域でもこの夏は計画停電が実施される様であるが、今のところその規模は定かではない。仮にピーク時の2時間程電気が止まったと想定しても、大変なパニックになることは容易に想像できる。工場は止まり店舗の明かりは消え、エアコンは使えず冷蔵庫も止まり、信号機は？…等等など。もちろん、建築現場も例外ではなく、どうやらこの夏はかつて経験した事のない様な夏になりそうである。

話は変わって、先日のコンビニでの出来事。私はお昼の弁当を買うべく店内に入った。弁当コーナーの前では、中学生くらいの女の子が二人、品定めに余念が無く、仕方なく私は店内を一周したがまだ品定め中。「へえ〜、この頃の子供はしっかりしてるな〜。」と感心もした。

ようやく品物も決まったのだろう、レジ前で私の横に並んだ時の会話。「あのなあ〜……。ジュースも買いたいんやけどお金無いねん。」と手の平の上で小銭を数えだした。その思いつくままの素朴で素直な行動は、一瞬にして私の心を楽しく、また熱くしてくれた。

家内は4人の子供たちを育てるのに、経済的にも随分と苦労をした。「子育ての真最中は、朝起きるとお金の事しか頭になかった。」と、時々当時を振り返るが、この言葉が当時の様子を深く物語っている。そんな中、子供たちには十分なお小遣いを与えていたとは考えにくく、きっと我が子も彼女達と同じような事をしていたのかも……と、そんな思いが、目の前にいる二人の女の子とリンクしたのである。

話は更にさかのぼり、私の子供時代の頃。当時（50年も前）はコンビニなどは無かったが、私には“ばあちゃん”のタンスがあった。“ばあちゃん”に育てられたと言っても過言ではないほど、私は根っからの“ばあちゃん”っ子であった。お腹を空かして帰ってくると“ばあちゃん”のおやつ作りが始まる。焼き芋やかき餅や片栗。また梅じその入ったおにぎりであったりと、いつも必ず私の目の前で作ってくれた。しかし、何故か？その食材はいつもタンスに入っていたのである。私はそのタンスを開けるのが楽しみであった。タンスの中には“ばあちゃん”の全財産（お金）も入っており、無断で失敬した事もあったが、“ばあちゃん”は知ってか知らずか一切その事には触れず、また怒られた記憶も一度もない。そんな“ばあちゃん”に対し、幼かった私は“ばあちゃん”を悲しませるような事をしてはいけない。」と子供心に深く反省した記憶がある。

現在、子育て中のお母さんからすれば、この様なしつけは過保護であり、悪い事は注意しながら教育するのが愛情だとお叱りを受けそうだが、今から思えば、“ばあちゃん”の愛情は、レベルの違う底なしの愛情だった様に思う。自分が“じいちゃん”と呼ばれる日もそう遠くはないと思われるが、かつての“ばあちゃん”のような「タンスの引き出し」を持ちたいと、悪戦苦闘する毎日である……。

ではまた来月もお会いしましょう。  
 今月も最後まで読んでいただき……、

あーがしう  
 ございました!!

